

第二十三回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

杉田 弘子 著

『漱石の『猫』とニーチェ 稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち』

(2010年2月10日 白水社 刊)

杉田 弘子 すぎた ひろこ 昭和10年(1935)生まれ。愛媛県出身。

専攻は比較文学比較文化研究。東京大学法学部政治学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化博士課程満期修了。東京大学大学院助手、独、伊、米で滞在研究。武蔵大学教授を経て、現在は武蔵大学名誉教授。

著書・論文には、『ツァラトストラ』(氷上英廣等四人の共著/有斐閣新書)、『ファミリーズ 欧米の家庭、日本の家庭』(TBSブリタニカ)、「ドイツ精神の悲劇と運命 ニーチェ・ロマン『ドクトル・ファウストゥス』をめぐる考察」(共著『ニーチェとその周辺』所収/朝日出版社)、「笑いの予言者、ツァラトストラ」(日本独文学会『ドイツ文学』85号)、「古代ローマとキリスト教」(人文学会雑誌34巻3号)など、主要翻訳書に、グロイター版ニーチェ全集第Ⅱ期第5巻『遺された断想』(白水社)、同全集第Ⅱ期第6巻『遺された断想』(二人の共訳/白水社)、『笑うニーチェ』(白水社)がある。

受賞のことば

このたびは姫路市が名誉ある和辻哲郎文化賞を私の著書にお与え下さったことに對し、大変驚くと同時にまことに嬉しく、心から御礼申し上げます。私の著書は十九世紀末、ヨーロッパで突然脚光を浴びた無名の哲学者ニーチェが、『神の死』の宣言や過激なキリスト教道徳批判で嵐のような非難を浴びる一方、若者たちの熱狂的な支持を受け、たちまち日本に移入され受容された過程を扱っています。これは近代化に悩む明治三十年代から大正時代の日本を代表する知性ともいべき人びとが、如何にニーチェに震撼させられたかをたどった著作ですが、この中にもっとも広く深くニーチェと取り組んだ和辻先生の章もあります。当時画期的本格的ニーチェ研究として絶賛された和辻先生の著作を取りあげたのです。この研究を通じて和辻先生の研究の独創性や読みの正確さに感嘆した私にとって、今回の受賞は望外の喜びでした。この受賞を励みに今後の研究を充実させていきたいと思っています。

《選考委員評》

陳 舜臣

ニーチェ思想の日本伝来と文壇や知識人の咀嚼過程とそれぞれへのインパクトを丹念にとりまとめた労作であり、著者がニーチェと日本の論壇の双方に造詣の深いことを物語っている。

この著作は、キリスト教文化圏以外での咀嚼過程に着目すればニーチェ研究の側面が強く、一方そのインパクトに着目すれば近代日本知識人に関する評論の側面が強い。両側面ともそれぞれ自立できる程度に斬新で魅力的なのだが、これらを統合して一段とレベルの高い著作に仕上げている。その結果、日本の近代化の中で知識人が自らの生き方に重大な問題を抱えているときにニーチェと出会い苦闘した状況が様々に描き出されており見事である。

なかんずく、標題に挙げられている漱石が、東洋文化と西洋文化の対立軸を抱えながらニーチェ思想と主体的に対峙した一連の記述や、ニーチェ研究者であり知識人でもあった和辻哲郎の『ニーチェ研究』に関する評論が興味深い。

評論対象とした知識人はこのほか著名人十指以上に達しており、ニーチェ思想との関連がそれぞれに綿密な資料調査によって裏付けられている。長年にわたる著者の精進なしには叶わない膨大な内容であり、資料としての価値も高いといえる。また、難解なテーマを

適正な論旨と正確な文章で記述し切っているのも高く評価できる。

梅原 猛

今回の最終候補作品はいずれもレベルが高く、それぞれの作品から私はいろいろ教えられた。なかでも、杉田弘子氏の『漱石の『猫』とニーチェ』は抜群におもしろくかつ新鮮であった。

著者は、夏目漱石の愛読した書物のなかから英訳の『ツアラトウストラかく語りき』を発見し、それに漱石が傍線を引いたりさまざまな書き込みをしたりしていることに着目する。漱石が甚だ熱心にニーチェの『ツアラトウストラ』を読んだことは間違いなく、しかもそれを読んだ時期が『吾輩は猫である』を書いたときと合致する。このことから著者は漱石の『猫』がニーチェの影響を受けたにちがいないと考え、そのニーチェの影響を受けたさまざまな箇所を指摘する。それは私ばかりか漱石の『猫』の愛読者の多くにとっても意外なことであろう。ニーチェのあの痛烈なる末人に対する批評を、漱石は滑稽な猫の人間に対する批評に変えたのであろうか。

著者は比較文学研究者であるが、五年ほど西洋に留学して、西洋の哲学もかなり熱心に研究したらしい。それゆえこの作品には、氏の本来もっている文学的感性とともに哲学思想についてのかなり深い理解の跡もみられる。特に、生田長江の文語訳『ツアラトウストラ』を読み自己の思想を深めた萩原朔太郎論など、みごとであるといわねばならない。

そして私が特にこの作品が和辻哲郎文化賞にふさわしいと考えた点は、和辻哲郎の著書『ニーチェ研究』を温かくかつ的確に理解していることである。ニーチェは高山樗牛によって有名になったが、その思想を哲学思想として研究したのは和辻が最初である。和辻は実存主義の流行をはるかにさかのぼってニーチェやキェルケゴールについて著書を書いたが、それはいずれも人格主義的な思想的立場からの論であり、ニーチェの思想をニヒリズムとして理解する戦後のニーチェ学者は和辻のニーチェ論に触れようとしなかった。そのような和辻のニーチェ研究の思想史的意義を高く評価したこの著書を、和辻先生は心から喜ぶにちがいないと思う。

山折 哲雄

近代日本の知識人が、これほどまでにニーチェの毒にあてられ、その狂気すれすれの人間洞察に首を垂れていたとは知らなかった。高山樗牛、夏目漱石、新渡戸稲造、阿部次郎、和辻哲郎、そして萩原朔太郎、芥川龍之介と、のきなみ文人たちの心中に食い入り、かれらの苦悩と絶望に救済の媚薬を注入しつづけていたとは、思いもかけない驚きだった。今日、『超訳 ニーチェの言葉』があれよあれよの売れ行きをのぼしているのも、その根は深い、明治の文明開化期にすでに種はまかれていたのである。

著者の杉田弘子さんは、その綺羅星のごとき知性たちが、どのようにしてニーチェの思考にワシづかみにされていったのか、との魅力にとり憑かれ自己再生の糧にしようとしたのか、精細に描きだしていく。なかでも圧巻は、やはり漱石の『猫』をめぐるニーチェ、ウィルスの跳梁ばっこぶりを、みごとにあぶりだしていく個所ではないだろうか。

もう一つ特記したいのは、これら文人たちの仕事にたいする批評と評価が、じつに堂に入り、的を射ているということだ。通して読んでみて、わが国近代の知性史の相貌がニーチェという無類の隠し味をすかして浮かびあがってくることに気づく。しかもその研究に着手してからほぼ半世紀、本書をバランスのとれた形に仕上げるまでには並々ならぬ努力の積み重ねがあったにちがいない。

もっとも、樗牛から朔太郎まで、漱石から芥川まで、まるでかれらのからだにニーチェの魂がのり移ったような気配が伝わってくるが、しかしその中であって和辻哲郎の場合だけはほとんど例外的にニーチェにたいして距離をおいていたことがわかる。対象にたいする相対化の力がつよく働いていることが、杉田さんの鋭い分析によって浮き彫りにされているからだ。その和辻の『ニーチェ研究』が、何と二十五歳のときの仕事だったというのであるから、もう舌を巻くほかはないのである。